

Title	市場原理が働かない公的分野における効果的な知識移転手法の一考察：平和展示資料館の知識移転の事例と技術経営への応用可能性
Author(s)	矢野, 博之
Citation	年次学術大会講演要旨集, 25: 623-626
Issue Date	2010-10-09
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/9373">http://hdl.handle.net/10119/9373</a>
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

## 2 D 2 7

# 市場原理が働かない公的分野における効果的な知識移転手法の一考察—平和展示資料館の知識移転の事例と技術経営への応用可能性—

○矢野博之（財務省主計局）

### 1. 序論

戦後65年を経過し、戦争を実際に体験した世代が減少し、戦争の労苦や平和の尊さへの思いを次世代に継承することが困難となりつつある。これらを風化させることなく正しく次世代に継承、つまり知識移転することができるかが大きな課題となっている。

一方、技術経営の現場に目を転じると、事業の縮小や再編あるいは中断などによって、貴重な技術が次世代に継承されず、途絶えてしまった技術も少なくない。そしていったん途絶えてしまった知識や技術は再度正確に復元することは極めて困難である。

異分野ではあるが、「戦争体験と平和の尊さ」の伝承の拠点である平和展示資料館を例にとり、時間、予算（資金）、人的資源などその限られた資源を有効活用しながら、上記公的分野の知識移転を継続的にかつ最大限のパフォーマンスを上げるにはどうすればいいのか、また、その技術経営へ応用可能性について考察するのが本稿の目的である。

### 2. 方法

戦争体験の伝承の拠点である全国各地の比較的大規模な「平和展示資料館」10館を選定し調査を行った。その結果をもとに、その各地の平和展示資料館の入館者数等の「量的側面からの分析」とインターネットを中心とした理解度の充実等の「質的側面からの分析」を通して最大のパフォーマンスを挙げていくにはどうすればよいのかを考察する。

### 3. 知識移転の定義

大きく分けて、知識「伝承」、知識「移転」、知識「スピルオーバー」、知識「共有」の4分類にわけて考察する。

#### ①知識「伝承」(hand down, transmit)

知識移転の中でも「伝承」は、他に比べて移転する内容が濃く、簡単に伝えられないものであるため、移転を開始してから完了するまで長時間を要し、中には移転速度が遅く、世代間をわたるものもある（現世代→次世代）

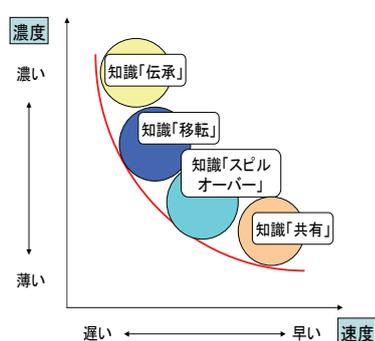
#### ②知識「共有」(Share)

知識（技術）の共有は、知識（技術）の伝承と対極をなすものであり、移転する内

容が薄く、そのため簡単に移転することができるため、移転速度は速い。例えば、IT を活用した社内でのイントラネット上での知識（技術）情報の共有などが該当する。

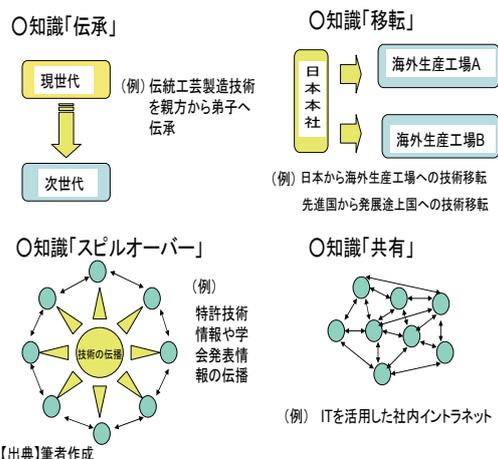
③知識「移転」(move,transfer) 及び④知識「スピルオーバー」(spread,propagate,circulate,spillover) については①と②の中間に位置するものとなるが、知識「スピルオーバー」の方が移転速度は速く内容は薄い。それぞれの（例示）は【図表1】【図表2】の通り。知識移転4分類の中での位置付けであるが、「戦争体験」は、知識「伝承」(hand down,transmit) に分類されるものとする。

【図表1】 知識移転4分類と「速度」と「濃度」のマッピング



【出典】筆者作成

【図表2】 知識移転の4分類



【出典】筆者作成

#### 4. 各地の平和展示資料館の入館者数等の「量的側面からの分析」

効果的な知識移転のためには、massの観点から一定期間の中で、知識移転の機会の増大、つまり、入場者数を増加させていく必要がある。【図表3】は、調査した全国の平和展示資料館入館者数を立地ロケーション（横軸：都心、都心郊外、地方中核都市、地方）と個人・団体別の来館者（縦軸）の間でどのような関係にあるのか探ったものである。当該資料館を運営していくにあたって、massの観点からの効果的な知識移転、つまり、来場者数を増やすにあたって伸びる余地があるにのほ、個人客か団体客（縦軸）か瞬時に判別可能なマップとなっている。楕円の大きさは入場者数を表す。

今後、資料館運営にあたって、やみくもにプロモーションをかけることなく、方向性を見失わず適正に運営していくためにはどうすればいいのか【図表4】（＝【図表3】を一般化）考慮した上で資料館運営を行うことが、効果的な量的知識移転の増につながる。

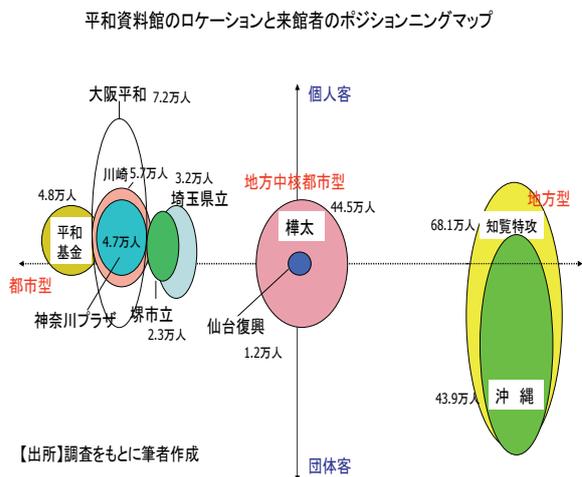
第2に各平和展示資料館の地域特性とその来訪目的の関係を表示したものが、【図表5】である。また、単発立地型と広域多目的依存型の定義を以下のとおりとする。

【定義】「単発立地型」・・・利用者が主としてその地域住民あるいは勤務場所に近く、その目的のためだけに利用されるケース

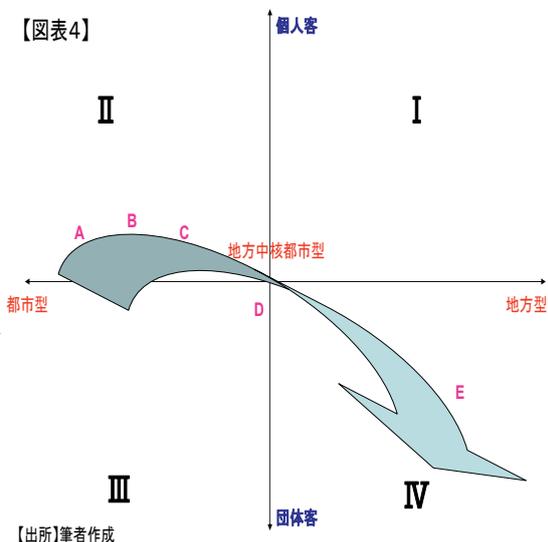
「広域多目的依存型」・・・利用者は、その地域住民はもとより広域からの来訪者で観光、修学旅行、ビジネスなどの複数の目的の一環で来訪するケース

都市型→地方中核都市型→地方型になるほど、広域多目的依存型となる。こうした傾向を把握した上で、第1での議論と組み合わせると、広域多目的依存型や地方型になるにつれ、入場者数が増える傾向が読み取れる。

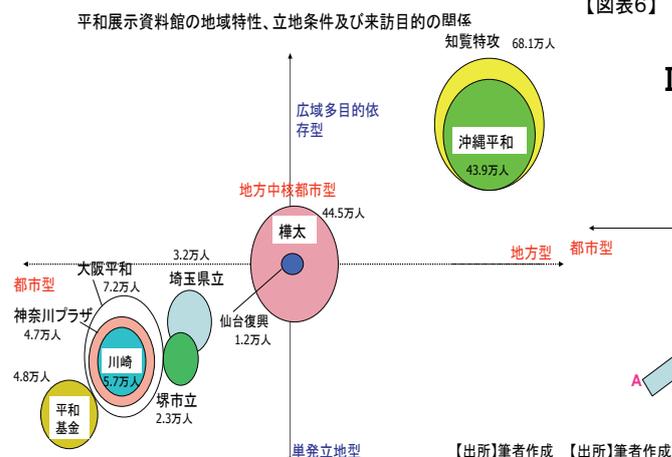
【図表3】



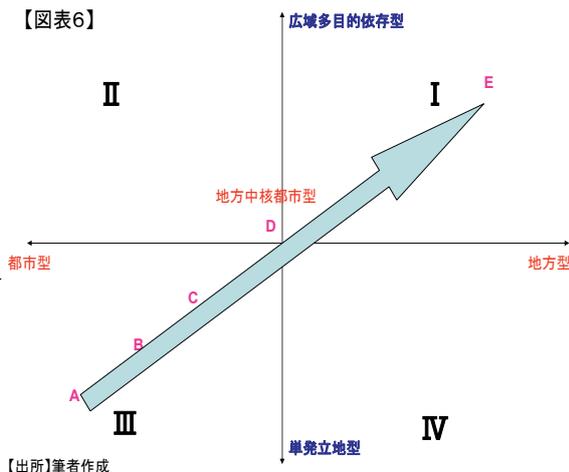
【図表4】



【図表5】



【図表6】

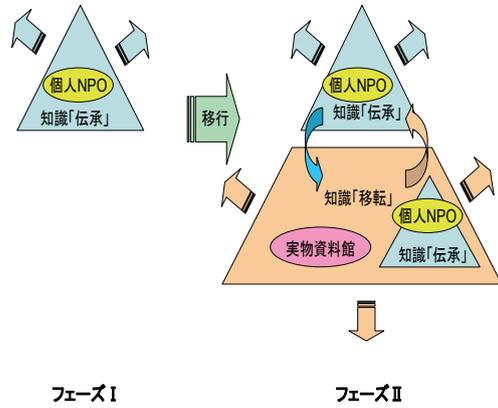


## 5. インターネットを中心とした理解度の充実等の「質的側面からの分析」

インターネットの普及とともに、デジタル画像展示品や動画ビデオ付きのネット資料館が登場し、知識移転プロセスは厚みを増したといえる。Ⅰ階層：社会共通基盤として位置付けられるネット資料館、Ⅱ階層：地域拠点活動として位置づけられる実物資料館、Ⅲ階層：ミニ集会/個人活動として位置づけられる個人 NPO これらが相互に影響・活用されながら、それぞれの階層で知識の「共有」「移転」「伝承」がされ、様々なレベルの知識を獲得し理解が進み、その質を高められると同時にスピルオーバーも発生し、それらの相互作用の中から知識同士の組換えが起き、知識移転とともに新たな知識創造へと発展していくことも考えられる。(【図表7】【図表8】参照。)

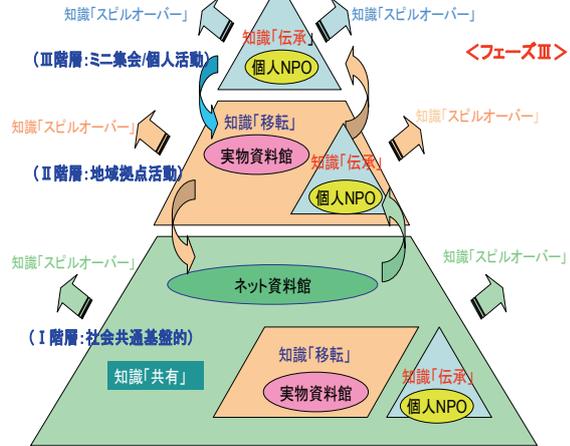
【図表 7】

知識移転4分類(伝承、移転、スピルオーバー、共有)とNPO、実物資料館の関係



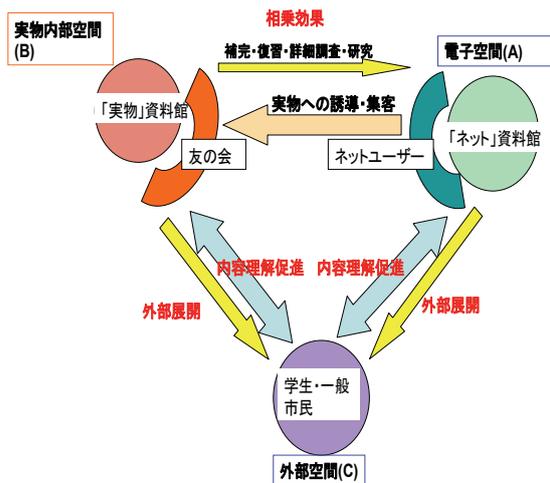
【図表 8】

知識移転4分類(伝承、移転、スピルオーバー、共有)とNPO、実物資料館、ネット資料館の関係



【図表 9】

平和展示資料館のネット活用による「内容理解促進」、「実物への誘導・集客」、「外部展開」



次に、ネット資料館が出現したことにより知識移転は3空間（電子空間、実物内部空間、外部空間）が出来、相互連携し質が向上できる知識移転が可能になった。（【図表 9】参照。）3大機能として①内容理解促進機能（展示動画ムービー、デジタルアーカイブ、ビデオライブラリ等）②外部展開機能（図書展示キット貸出し、友の会活動）③相乗効果発揮機能（メールマガジン、セミナー開催、語り部来館、企画（解説員付き）見学等）が発揮され、3空間は厚みのある知識移転、知識創造の場となったといえる。知識共有→知識移転→知識伝承とい

う具合に、より定着が強固な質の高い知識移転が可能となったといえる。弱点としては、この分野は公的分野であり対価が発生しないため移転のインセンティブが少ないし、スピルオーバーも弱い。しかしながら、商業ベースに乗らない知識や技術の継承でも、本稿で述べたようなネットの活用により、新境地を開く可能性があるのではないかと考える。知識移転の性質をうまく利用し、新たなスキームやメカニズムを取り入れた効果的な知識移転手法を考案していくことが重要であると考えます。

【参考文献】 樺太関係資料館、仙台市戦災復興記念館、平和祈念展示資料館、埼玉県平和資料館、地球市民神奈川プラザ、川崎市平和会館、大阪国際平和センター、堺市立平和と人権資料館、知覧特効平和会館、沖縄県平和祈念資料館の各 HP 及び取材調査